

こひつじ

テーマ 『担い合う』
『互いに交わりを深めよう』

2024年 初夏号
564号

2024年6月30日
カトリック香里教会
編集・発行/宣教委員

キリストを

真ん中にした

『交わりの教会』

主任司祭

ヨゼフ 林和則

3月10日の主日のミサ

より、香里教会に赴任いた

しました大阪高松教区司祭、

林和則です。ただ、実は今

から10年前、2014年

の3月に一か月ばかり香里

教会の司牧を担当したこと

がありました。当時の主任

司祭であった松村繁彦神父

様が一時的にカンボジアに

滞在されることになったた

め、その間の「留守番」を

依頼されたのです。そのた

め、再び香里教会の司祭館

に足を踏み入れた時に感じ

たのは「なつかしさ」でし

た。「帰って来た」かのよ

うな思いで、それほどの違

和感もなく落ち着くことが

できました。

私は主任司祭として、信

徒の皆さまの信仰を深める

ことを第一にして務めてい

きたいと考えています。信

仰が深まれば、信仰の喜び

も増します。この信仰によ

って生きる喜びがなければ、

ミサへの参加も義務的な、

習慣的なものになってしま

います。教会活動も信仰に

基づかなければ「遣わされ

た者」としてではなく、こ

の世的な成功や賞賛を求め
るなどの自己のための活動
になり、教会が自己を主張
し合う争いの場になってし
まうことにもなりかねませ
ん。「神」が不在で人間的
な思いだけがぶつかり合
う、この世的な「組織」に
なってしまうのです。

信仰を深めるということ

を言い換えるならば、それ

はより深く神と結ばれて行

くことです。キリスト教で

は神の子が人間イエスとな

ってくださったことによっ

て神と結ばれることができ

るのです。これはすばらし

い恵みです。

「いつ呼び求めても、近く

におられる我々の神、主の

ような神を持つ大いなる国

民がどこにあるだろうか。

(申命記4章7節)

この神のことばはイエスに

おいて実現しました。「近

くに」というのは距離的な

近さだけではなく、人間とは
はるかにかけ離れた存在であ
る神が人間となってくださつ
たことによって「親密な」交
わりが持てるようになったこ
とを表わしています。私たち
はイエスを通して神と人格的
交わりを持てるようになった
のです。イエスとつながるた
めにはイエスの生きざまが刻
まれている福音書をはじめと
する神のことばである聖書に
親しみ、イエスの残されたミ
サを頂点とする秘跡に生かさ
れて行くことが土台となりま
す。その土台があつてこそ、
教会共同体の交わりが人間的
な思いではない、神の思いに
よる交わりになることができ
ます。

香里教会がキリストを真ん中

にした交わりの共同体になれ

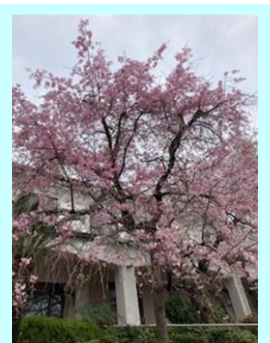
すように、一緒にがんばって

いきましよう。

目次

・林神父巻頭言	……	p. 1
・四旬節黙想週間	……	p. 2
・聖週間を振り返って	……	p. 3
・「堅信の秘跡」に与る	pp.	4-5
・座談会「担い合う」	…	pp. 6-7

・「担い合う」を図解する	…	p. 8
・さらば、「歩こう会」	……	p. 9
・初めてミサに来た方に	…	p. 10
・大阪高松教区情報	……	p. 10
・編集後記	……	p. 10



四旬節黙想週間

林和則神父

今年の四旬節黙想会は三月十日の週に三回の講話と十字架の道行きで行われました。

キリストご復活前の十字架のご受難の苦しみを偲ぶ典礼での三回の講話の概要を改めて思い起こしましょう。

第一回講話「あなたは塵であり、塵に返りなさい」

聖書参考箇所…創世記2章4節―3章19節

アダムとエバは神と人、人と人、人と全被造物との完全な信頼関係の中に生きていました。「二人とも裸であった(2:25)」はそれを象徴的に表しています。「裸」は「ありのままの自分」と言い換えることができるでしょう。弱さと欠点に満ちた自分を隠すことなく、さらけ出しても「恥ずかしくない」というのは相手への完全な信頼が

あつてこそ可能になります。

エデンの園が「楽園」であつたのは「場所」ではなく「関係性」にあつたのです。

けれども、アダムとエバは「神のようになりたい」という高慢と支配欲によつて、その「完全な信頼関係」という「関係性」を壊してしまいました。その結果、相手への不信と恐怖が生じてしまい、人類は「楽園」を失つてしまつたのです。

「塵にすぎないお前は塵に返る(3:19)」は呪いの言葉ではなく「自分の弱さと罪を認めてへりくだりなさい」という神からの呼びかけ、招きなのです。私たちは自分の弱さと罪を認めることによつて、神に立ち帰ることが出来ます。「塵」である私たちは神の恵みによつてしか生きていくことができないからです。

第二回講話「自分の独り子である息子すら惜しまなかつた」

聖書参考箇所…創世記22章1―18節

アブラハムは百歳にして初めて正妻であるサラとの間に男の子を得ました。アブラハムにしてみるとまさに目の中に入れても痛くないほど愛らしい子であつたことでしょう。けれども神はその独り子を焼き尽くす捧げものとするようにとアブラハムに命じます。アブラハムがどのような思いであつたのか、それについての心理描写は全くありません。ついにアブラハムがイサクの上に刃物を振り上げた時に神は「その子に手を下すな(22:12)」とアブラハムを止めます。そして言われます。「あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることが惜しまなかつた(22:12)」。

それが神の子が人間イエスとなり、十字架の死を通してささげられたことによつて実現したのです。忘れてはならないのは、神はイサクがささげられることを止めてくださいました。けれども人類はイエスがささげられることを誰も止めなかつたのです。人間であるイサクは生き、神の子であるイエスは死んだのです。

第三回講話「主の日――新たな安息日」

聖書参考箇所…創世記1章1節―2章3節

創世記1章の天地創造の物語は「バビロンの捕囚(紀元前597―539年)」の時代に祭司たちによつて書かれたと考えられています。バビロニア帝国によつてユダ国が滅ぼされ、神殿も灰燼に帰し、主だった民がバビロンに連行され捕囚の生活を送ることになつたことは、ユダヤ人にとつて国家の消滅だけでなくイスラエルの神への信仰の危機でした。イスラエルの神がバビ

ロニアの神々に「敗北」したように思え、また、それまでのユダヤ教の信仰また礼拝の中心地であつた神殿がなくなつてしまいました。まさにイスラエルの宗教は存亡の危機に立たされたのです。異国の地にあつて絶望と混沌の中にあつたユダヤの民に「光あれ(1:3)」と祈りをこめて呼びかけたのが、この物語だったのです。ここにはユダヤの民のアイデンティティ、そして信仰の「再生」への祭司たちの願いと祈りが込められています。ですから実はこの「創造」はバビロニアの侵略によつて滅び去つた「世界」の「再創造」だったのです。私たちもこの四旬節を通して、現在の傷つき混沌とした世界がキリストの復活の「光」によつて新たにされるように祈りましょう。

(宣教委員 Y)

聖週間を 振り返って

〈聖週間のミサに与かって〉

三月二十日から聖週間に入り、主の受難の主日からイエス様のことを思い起こさせるイザヤ書の主のしもべの箇所が朗読されました。そして木

曜日、イエス様は弟子たちの足を洗うことにより私たちが信者の生き方を示してくださいました。金曜日、律法学者たちはうとましい存在であったイエス様を最低の人間として

「まったくの無」にしたかったため、木にかけられるものは呪われるという十字架上で殺しました。しかしそれを甘んじて引き受けたのは父である神への従順であり父の道具としてありたかったイエス様の思いであったのです。

しかしイエス様は復活しました。このことは歴史的には証明できません。なぜならこ

のことは神秘体験だからです。でも実はこのことは間接的には証明できるのです。それはイエス様が復活したことを信

じる弟子たちが教会を創り、その教会が世界にまで広がり、今もなお洗礼を受けイエス様の復活を祝っている現実が物語っているからです。

週の初めの朝早くマгдаラのマリアが空の墓を見たところマルコの福音書を聞いた私たちが自分たちの生活の場で喜びをもってイエス様の復活を述べ伝えるのです。

今年の聖週間の林神父様の説教を聞いて、復活して常に私たちと共にいてくださり、こよなく愛してくださいたい。イエス様を私たちが述べ伝えることの大切さを新たにしました。

復活祭の日、銀祝を迎えられた林神父様を囲んで四年ぶりのパーティが催されました。久しぶりに懐かしい方々の顔も見られ、なごやかな雰囲気

の中楽しいひと時を過ごすことができました。心から神様に感謝したいと思います。

(宣教委員 M)



「聖なる三日間の
説教のポイント」

「聖なる三日間」は「出エジプト」に替わる新たな超越である「キリストの死と復活」を記念するための典礼です。聖書の「記念」には単に出来事を「思い起こす」だけでなく、その出来事がまた「現在化」するという意味が含まれています。「聖なる三日間」の典礼を執り行うことによつて、「キリストの死と復活」が私たちの現在の教会の中に

再起し現存するのです。

聖木曜日の「主の晩さんの夕べのミサ」は「最後の晩さん」を記念する典礼です。

「最後の晩さん」においてイエスは聖体の秘跡の制定をされて、私たちに「ミサ」という最大の恵みを残してくださいました。この「聖体」は「最後の晩さん」を包み込んでいたイエスの「この上ない愛」が結晶化したものであるといえます。私たちはミサを通して、聖体を通して、今もイエスの「この上ない愛」を実感し、頂くことができます。

聖金曜日の第一朗読「イザヤの預言 52章 13節〜53章 12節」は「苦難の僕」と呼ばれている箇所です。弟子たちはここに預言されている「わたしの僕」の姿に十字架のキリストの姿を見出しました。この世的には敗北の象徴であった十字架を逆にキリストの勝利、栄光として崇めていったのです。それはまさにこの世的な価値観が逆転し、

まったく新たな福音的価値観へと開かれていく、新しい世界の始まりでした。十字架を担って生きることは、この世的な価値観ではなく、福音的価値観に従って生きていくことなのです。

復活徹夜祭における復活のろうそく、この光こそが復活のキリスト、今も私たちの中に生きておられるキリストのシンボルで、復活徹夜祭の中心です。その光は聖堂の中だけで輝いているのではなく、全世界に輝いているのです。それは新しい天地創造であると言えます。「光あれ(創世記 1章 3節)」神がこの世界を創造される際に最初に発したことが、それによって混沌の地に輝いた光、キリストはまさに復活によって、人類の混沌の歴史の中に新たな光、神の愛を輝かせ、世界を新たにされたのです。

(説教 林和則神父)

キリストの聖体のミサでの堅信式

去る6月2日、カトリック香里教会では酒井司教による「キリストの聖体」を記念するミサが執り行われ、この記念すべき日に、香里教会の6名の若い信徒が、司教様から堅信の秘跡を授けていただきました。

(説教台の酒井司教)



「堅信の秘跡」について 酒井司教のお話から

私たち信仰者にとって、偶然や「たまたま」はありません。

ん。全ては神の摂理の中にあると信じています。ただし、私たち人間がそれを邪魔してしまうことはありません。それでも私たちは人生に起こる全てのことを通して、神の摂理を感じ取ることができ、それによって人生に意味を見出すことができます。ですから人生に起こる全ての出来事は、神からの呼びかけなのです。神は出来事を通して、私たちに語りかけます。私たちはその神の声を聞きとらなければいけません。そして行いに反映させなければいけません。そのためには、私たちは神のの前に沈黙する必要があります。でなければ聞き逃しかねません。日々の生活の中でも黙想の時間を取ることは、とても大切なことなのです。

堅信の秘跡を受けることは一生に一度です。それを「キリストの聖体」の日に受けるということも偶然ではなく、神からの「呼びかけ」です。それは受堅者だけでなく、代父母そして香里教会共同体の

皆さんへの「呼びかけ」です。その「呼びかけ」を沈黙のうち心に澄まして聞き取りましょう。

まず「聖体」に心を向けましょう。ご聖体はきわめて神聖であると同時にきわめて人間的なものです。普通のパンであるのに司祭が聖別の言葉を述べることによって、そのパンにイエス・キリストがおられることとなります。

人間的には、人は一生においてしばしば愛する人との別離を余儀なくされる場合があります。その際には少しでも相手に自分を思い起こしてもらうために写真を交換するなどのことをします。けれども写真はあくまでも「しるし」であって、その人自身ではありません。

神的には、キリストは「しるし」ではなく「現実」としてキリストご自身がお残りになったのです。今月は「み心の月」です。イエスの「み心」は確かに神的なものです。同時にイエスは私たちと同じように「暖かい心」を持っていることを示しています。愛するあなたがたと別れたくない、いつまでも一緒にいたい、という「暖かい

心」のあふれ出たものが「聖体」なのです。

そのイエスの「暖かい心」をミサに与るとき、また教会に聖体訪問に来る時、私たちは味わうことができます。

堅信についてお話ししましょう。堅信式において、受堅者の額に聖香油が塗られます。聖週間の聖香油ミサにおいて前田大司教様が性別された香油です。そこにはバルサムがふんだんに入れられていて、嗅いでみればいい香りがあります。それはキリストの香り、やはり「暖かい心」のあふれ出た香りです。キリストの香りを受けて、受堅者、そして堅信式に与った香里教会の皆さんは新しい信仰の歩みを始めます。

信仰の歩みは「聖体行列」になぞらえることができます。聖体を拝領した私たちは聖体を自らの中に宿して人生を歩むこととなります。それは、一生をかけての「聖体行列」です。

(説教要約・林和則神父)

2024年6月2日香里教会で堅信の秘蹟を受けた方々

洗礼名	氏名(年齢)	地区	洗礼名	氏名(年齢)	地区
テレジア	Y・O(19)	F	クララ	Y・O(17)	F
使徒 ヨハネ	S・S(14)	A	使徒 ヨハネ	K・N(13)	D
ベルナ デッタ	R・O(13)	F	アッシジの フランシスコ	I・S(12)	A





I・S君

6月2日、僕は堅信を受けました。今回の堅信は、僕の通っている香里教で、酒井司教さんに行ってもらいました。酒井司教さまのお説教もとても良いものでした。

また、たくさんの方々が来てくれて、とても嬉しかったです！この堅信式は、僕にとって、一生心に残る、とても良いものになったと思います。



K・N君

心に残りました！



S・S君

堅信を生けるにあたって、たくさんの方々の協力のおかげで、ここまで来れました。ありがとうございます。



Y・Oさん

今回堅信を受けて、教会についてより深く知ることができました。いろんな方とお話しできて、とてもいい経験になりました。

Y・Oさん

大学生になった年に堅信を受けられてとても良かったと思っています。小学生に受けた洗礼の勉強よりも、もっと神様を詳しく知ることができました。酒井司教様の貴重なお話を聞く事ができてとても嬉しいです。

R・Oさん

堅信を受けられて良かったです。思い出に残りました。



6月2日(日)聖体の記念日に左写真の6名の信徒が堅信の秘跡を授かりました。ミサ後お祝いのパーティーがありました。

酒井司教様、林神父様、受堅者と代父母、身内の家族、親族が集まり、みんなで祝いしました。



司会 教会には、信徒の皆さんが互いに担い合いながら果たしていかねければならない仕事の色々あります。共に荷を背負い、協力して困難を乗り越え、実が結んで喜びを分かち合う、そこに強い絆が生まれる。そんな営みに日々挑戦している仲間がいます。今日は、「担い合う」ことの意義とその難しさなど、それぞれの体験を語り合っていた欲しい、そんな思いでお集まりいただきました。よろしくお願ひ致します。

先ずは、子どもたちの教育に長年携わって来られた信仰教育委員会の皆さんに、これまでの取組みについてお話しただきたいと思ひます。

日曜学校の運営

と侍者の育成

T(信仰教育委員長) 子どもが多くて忙しかった昔は、IOさんとSママと私の三人で50年くらいやってきました。

でも今はAIちゃんを中心になって面倒をみて下さっていて、子どもたちは日々成長しています。子どもたちと一緒に走り回るのが私の喜び。これから何をすべきか難しいことは若い人にお任せです。今年も夏季合宿の実施(7月末の2日間)を承認していただき、子どもたちのお世話をするのがとても楽しみです。子どもたちと一緒に走り回り、それが私の喜び。80歳に見えないでしょ。

座談会 「担い合う」教会を目指して

AI Tさんは子どもたちのために、ほんとにこまめに動いてくださっています。Sママは91歳で、今もご老体に鞭打って子供たちのリーダーを務めて下さっています。

S 香里教会では日曜学校も侍者の育成も、昔からよくやって来られた。その昔「錬成会」というのがあり、子どもと大人と神父様も交えて勉強会をやった。香里教会には昔から歳をとっても労苦を厭わず自発的に働く人がお

られる。高齢になっても繋がりが保たれる。今、委員会制度になったがここまでやってくれる人は少ないのでは。AI かつてわたしたちが子供の頃、諏訪神父様の時代(45年ほど前)の日曜学校が楽しかったし、朗読についても教えていただきました。その後の松浦悟郎神父様ほか多くの方々のお世話になり、その恩返しをしたいと思ひます。Sママは91歳になられた今もご老体に鞭打って

子どもたちのリーダーをされています。いつも怪我の無いようにと念じています。

林神父 お話を聴いていて、まず感じたのは、日曜学校の先生のみなさんが、子供の頃から香里教会で育った方が多いということ。結婚や就職で離れていかれる方が多いのが普通だが、香里の方の多くはここを離れないで香里の地に根付かれて仕事を継続してやってくださっている。みなさんお互いに気心知れた関係に

教会は奉仕の場。

先輩に見習う。

あつて、その協力関係が引き継がれている。素晴らしいことだと思ひました。司会 T様のお話しから、自ら進んで責任を担うこと、それも楽しんで担うことの素晴らしさに正直感動しました。見習いたいと思ひます。

S 話はあるが、毎朝5時頃から一人で教会の掃除をしておられる方がいる。雨が降ろうが風が吹こうが…。八十三歳を超えた女性の方で、四十年以上も教会の掃除をされている。教会は奉仕の場だと思ひます。年齢関係なしで。立場はみな一緒のはず。

林神父 その方は毎朝のミサにも来ておられます。

S なかなかできることじやあない。昔は、今のようない委員会制度が無くても苦勞を厭わず働く人がいた。私自身教会に世話になつていてからお返ししないと、思つて他人がやらないようなことをやるよう努めている。どぶ掃除とかトイレの裏のパイプが詰

まつていればそれを直すとか。教会に世話になつていてからお返ししなければいけません。ただそれだけの気持ちでやっている。司会 Iさんはその昔、教会のすぐ近くにお母さんと住んでおられ、香里教会と縁の濃い方です。今は大阪市内から教会に通つておられます。信仰のあり方について一席お願い致します。

I 十年程前にカトリックを含めて有名な宗教家が集まつて世界宗教者会議が開かれました。長い討議の末に到達した結論は、宗教によって崇める対象は違つても、皆「信じる心」を持つていてということでした。自分の宗教を前面に出すのではなく、みんな「信じる心」を持つた人たちだと思えば、そこに共通するものがあることに気づいて互いに受け容れる気持ちが生まれる。宗教を自分の都合で前に出さないことが必要。近い将来には信じる心と感謝する心が信仰の二大柱になる時代が来ると思ひます。

↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓

「担い合う」＝「奉仕」。
責任を背負うこと！

○「担い合う」とは一人でなく複数で責任を持つということ。ここ数年典礼委員長をさせていただいて、当初非常に大変でしたが、周りの委員さんたちがサポートしてくれて「**担い合い**」が実現して非常に助かったという経験をしました。「**ともに歩もう**」は今年の評議会のテーマですが、なかなか難しい課題です。

AI「**担う**」という言葉は重くて難しい(しんどい)と思う。私は信仰教育で**奉仕グループ**をやっています。子どもにずっと関わりたかったから**奉仕グループ**でやらせてもらっています。教会の仕事は結局「**奉仕**」なのでボランティアではない。侍者の親御さん達は**奉仕とボランティアの違い**がわかっておられない。まあみんなができることを楽しくやればよいのではないか。

S 教会の仕事は、**奉仕**だ。教会の仕事をして腹を立てるのなら最初からやらなければよい。年齢は関係ない。

Y わたしは結婚して香里に移り住み、それ以来香里教会に所属しているYと申します。以前「こひつじ」誌の編集に関わっていたこともあり、この度、FO様からお誘いを受け、宣教委員会の**奉仕グループ**に入らせていただきました。今日のこの会合に出るようお誘いがありました。今後「こひつじ」のお手伝いを含めてお世話になります。よろしくお願ひ申し上げます。

それぞれに「独自の寄与」を果たそう

司会 「**奉仕グループ**」の役割は、これからますます高齢化が進むであろう教会において委員会活動を維持し、活性化する手だてとして考えていくべきだと思います。若い層に働き手が見つかりにくい現状を、中高年者が担い合つてカバーする。**奉仕**であつてボランティアではない。「**責任を引き受ける奉仕グループ**」の役割がますます必要になって来ると思います。

教会来訪者には親身
になって対応を

司会 香里教会にも最近外国(ヴェトナム他)の信者や他教会(長崎など)から移籍して来られる信者さん、未信者の方が朝のミサにあずかるため香里を訪れられることがちよくちよくあります。宣教委員会の受付係が門の前で気づけば対応していますが、十分ご案内できない場合があります。T 宣教委員だけではなく、

気づいた信者が誰でも率先して行動しないといけませんね。はじめての人、外国の信者問わずお声掛けをしてご案内するように力を合わせて工夫しましょう。

S ミサ後に外国の方だけでなく、日本の方でも他教会から来られた方の自己紹介をしていただくことを、なるべく早く実現していきたい。

林神父 受付は大切です。みんなに関わるように工夫していきましよう。

教会の活動はすべて奉仕

林和則神父

林神父 教会の活動はすべて奉仕です。イエスが最後の晩餐の前に弟子たちの足を洗われる。洗い終わった後、あなた方も互いに足を洗いなさいと言われた。これが教会という共同体の基本です。互いに**任え合う**、足らざるを**補い合う**、これがキリストを真中にしての奉仕の集いなんです。大事なことは「**ともに歩む**」ということ。何か結果を出すための方法ではなく「**ともに歩む**」ことそのこと自体が目的であり、結果は問わないんです。たとえばバザーの目的は、あくまでも一つになること、「**ともに歩む**」ことであつて、結果は問わない。効率化と利便性を優先すると「できる人」だけが活動し「できない人」が置き去りにされる危険性があります。パウロはコリントの信徒への手紙で言っているように「**体の中でほかよりも弱く見える部分がかえって必要なのです**。」(コリントの信徒への手紙12・22)。ところがこの弱い人と「**ともに**」ということがすごく難しい。弱い部分を助けようとして協力する。そこに一致が生まれる。強いリーダーがいると素晴らしいチームになると思いますが、**教会は一番弱い人を中心としてともに歩んでいく共同体**でありたい。一番弱い人をみんなが助け合い、支え合う。そこに一致が生まれる。効率を求めてしまうと、強い人、声の大きい人、能力がある人が前に出ちゃう。ついていけない人をどんどん切り捨てていくことになる。それは教会ではなくて会社。わたしたちは切り捨てない。効率が悪くても仕事が遅れてもできない人を巻き込んで、みんな**でやった**！それが教会の成果です。結果じゃない。どれだけ協力者と共に歩んだか。それが**教会の成果**をはかる物差しです。90歳のおばあちゃんと一緒にやっていく。それが「**担い合う**」教会なんです。「**担い合う**」こと自体が目的なんです。

「座談会」の要点を図解してみました。“担い合う”ことの意義を共有できればと願いつつ…。

I. 教会は、世話になっているからお返しをする奉仕の場。

昔は、委員会制度がなくても、教会で苦勞を厭わず働く人がいた。教会に世話になっているからお返ししなければ、という気持ちが強かった。

毎朝5時から一人で教会の掃除をしている高齢の女性がおられる。毎朝ミサにも与られる。教会は奉仕の場だと思う。

十年前、世界の宗教家が集まって会議を重ね、得た結論は、皆「信じる心」を持っていた。将来「信じる心」と「感謝する心」が信仰の二大柱になる時代が来ると私は思っている。

香里教会には

II. 支え合い、困難を乗り越えて仕事を果たす人々がいる。

共に荷を背負い、協力して困難を乗り越え、実が結んで喜びを分かち合う。そこで初めて強い絆が生まれる。言うは簡単だが、いろいろの困難が伴う。

香里教会では昔も今も日曜学校と侍者の育成を根気よくやり続ける人達がいる。九〇歳を超えてなお、喜びを持って子どもたちに接し、指導している方々がおられる。

「担い合う」とは、互いに「責任」を引き受けること。人々は「担い合う」ことで心が通じ合い、教会全体が共感し合い、持続可能な組織になる。互いに荷を「担い合う」ことは、仕事の達成、人間関係の形成において重要な役割を担っている。

III. 教会の仕事は「奉仕」であってボランティアではない！

「担い合う」とは一人ではなく複数で責任を持つこと。実は、これがムツカシイ。教会の仕事は「奉仕」であり、互いに担い合って、「奉仕」の目的を果たす。担い合うには助け合う気持ちが必要。互いに荷を負うことで、生きた「奉仕」が可能に。

教会の仕事は「奉仕」であり、ボランティアではない。責任を引き受ける「奉仕グループ」の活用は、これからの香里教会の活性化を考える上でますます重要になる。

去る四月二十八日、日曜日の午後、香里教会の信徒(女性三名、男性三名)、そして、ご着任後間もない林神父様にもご参加いただき、計七名の方々に「担い合う」をテーマに座談会をもちました。香里教会で、それぞれの仕事で中心的に活動されている皆さんの日頃のご苦勞、これからどうあるべきかを含めて、忌憚のない、活発な話し合いに時間の経つのも忘れながら…。それぞれの場で、日々の苦勞を分かち合いつつ、もつとこうありたいとの意見が大半で、前向きのお話しに満ちた時間を持つことができました。感謝一杯!!。発言者それぞれの想いが読者にそのまま届きますように、と願いつつ6、7頁を綴りました。文字ばかりでは読んでもらえないかもと心配になり、この8頁では話し合いの中味の要点を図解してまとめてみました。じっくり目を通していただければ嬉しい限りです…。

座談会司会者(宣教委員)

さらば、歩こう会

T・T&T・K

思い起こせば二十七年前の一九九七年（平成九年）六月二一日に産声を上げた「歩こう会」は、思いのほか長寿で、やっと今年の二千二十四年二月二十八日に、合計二六七回の挙行日を最後に、すべての幕を閉じました。

その行き先ときたら誠に多彩なこととなりました。一番遠くの目的地として、北は乗鞍岳、上高地、南は湯布院、高千穂そして長崎、平戸と、よくもまあ元気に歩きました。勿論、歩くばかりじゃ能がないので、たまには皆生（かいけ）温泉に浸かって骨休みもいたしました。これらの活動には、まだ会員たちが若々しくて元気なことで、代々の世話人の心意気と機転がなせる技だと思われます。

初代の世話人のKさん、その奥様の紫の君をお連れしての華麗なる二人三脚を思い出します。二代目はFさんです。非常に物知りで、大いに世相談義に花が咲きました。

三代目S・Mさんは颯爽とお歩きになりながら懐に忍ばせた麦酒を嗜む早技には感服でした。それを見て見ぬふりをされながら、行く先々で野に咲く花を愛でている奥様は、花の名前に妙に詳しいので花博士とお呼びしていました。四代目のOさんはとても紳士で、彼の人柄で女性会員もうんと増えました。とくにY・Mさんは彼のアシスタントとして大活躍をしていました。

さて、後を引き継いだ私、五代目Tは、あのO、Mの名コンビにあやかりたいと、誰もが認める世界通、旅行通のT・Kさんを大番頭に納まり願って、万全の態勢で臨みました。まずは足元を固めることです。地元の古代史を追うことにしました。鉢かつき姫の民話に出てくる山根街道を手始めに、物部氏、蘇我氏、秦氏、竹取物語から始まって、石上神宮、西行、行基、在原業平、継体天皇、

大化の改新、白洲正子、司馬遼太郎、田辺聖子等々いろいろな関連地域を歩きました。さらに、花脊の交流の森や平郡の簡保の宿にも宿泊しました。

しかしながら、これだけでは我々がクリスチャンであることの値打ちがない。有難いことに、河内キリシタンの話が突然と出現しました。時代的には戦国時代、一五六四年永禄七年に現在の大東市にある飯盛山城で、城主三好長慶臣下の七十三人が集団洗礼を受けたのが河内キリシタンの始まりでした。それ以後、最盛期には、周辺に数万人もの信徒がいたそうです。その痕跡を辿って歩き続けることができたのは幸いでした。T・Kさんの名サポートに支えていただきながら、結局七年間の長きにわたって、世話人の任を無事に果たすことができました。神に感謝です。

「歩こう会」のある日…「王寺⇒竜田公園⇒大和平郡「業平道」散策⇒温泉かんぼの宿」



2019年7月24日～25日 右の「かんぼの宿」で1泊



1997.6.21(第1回)～

2024.2.28(第267回!)

(27年間毎月1回)

うち一泊旅行は15回。みなさんどうもありがとうございます。大変お世話になりました。



毎月1回 希望の者が 野外に出かける 気楽な グループ。
毎月第三土曜日。午前9時集合して出発の有志の会。
リーダーと補佐役は必ず事前に下見 ⇒ 成功のもと!

「ミサに来られた方」を歓迎し、

お世話しましょう!!

他教会から来られた信者の方。

・学校(同志社香里高校など)から、課題の一環として訪ねて来られる生徒(中学生)。

・その他、カトリックに関心をもって初めて香里教会を訪ねて来られた方々など…。

◎私たち信徒は、香里教会を訪ねて来られる方に対し、親切にご案内しましょう。

(1) 聖堂でミサに与かる席を見つけてご案内。

・「また来よう」と思っていただけけるよう、相手の身になってご案内しましょう。

・一緒にミサに与ってくださる信徒の方にミサ中のお世話をお願いする。

・未信者の方には聖体拝領の時、司祭から祝福をいただけるよう付き添う、等々。

・ミサ終了後、機会をみて神父様にご紹介する。また来ます、よろしく。」の気持ちをもっていただけるようできる範囲で配慮しましょう。

(2) 他教会から香里に移籍される方のご案内。

・事務所にご案内しましょう。

初めて香里教会を訪ねて来られる方に対して、宣教委員会委員をはじめ、多くの信徒が適切な行動を率先して行う教会にしていきたい。

「大阪高松教区」情報

新年になったばかりの1月1日(月)16時10分石川県能登地方を震源とする大地震がおきました。地震による津波もおき、甚大な被害がもたらされました。

報道によって被害が明らかにされる中、1月9日(火)には教区から祈りと募金のお願いが出されました。

香里教会では1月14日から28日まで募金が行われ、名古屋教区とカリタスジャパンに送られました。

息の長い支援が必要となります。

昨年10月に新教区となった大阪高松大司教区は、四月から法律上も新宗教法人としてスタートしました。

東部版、西部版としてそれぞれの旧教区ごとに出されていた教区報も、四月からひとつの大阪高松教区報として発行されるようになりました。

小教区では1月7日(日)に昨年帰天されたペトロ梅原彰神父の五〇日祭が行われ、たくさんの参列者が思い出と感謝を分かち合いました。

日本語研修のために香里に居住されていたティアゴ神父は4月14日付で武庫之荘教会へ。

香里主任の赤波江神父は3月10日付で四国カトリック会館へ。

林和則神父が垂水教会から香里教会へ着任されました。

林神父によって、3月12日から15日までと17日に3つのテーマで四旬節黙想会が行われました。

3月31日(日)の復活祭の後、みなさんにゆで卵が配られ、久しぶりのパーティでご復活の喜びと林神父の銀祝がお祝いされました。



編集後記

4月28日(日)の午後2時からヴェロニカの部屋で林神父様を交えて7名(女性3名、男性4名)の方々にお集まりいただき座談会を催しました。テーマは「担い合う」。話し合った内容はほぼありのまま本紙6〜8頁に詳しく載せています。

この「担い合う」という言葉の持つ意味が、日頃人間社会に参加している個々人にとって、どれほど重要な意味を持っているか。互いに「担い合う」密度の濃さ如何で、個々人にとっての人生の意義、そして参加している集団の存在意義をも大きく左右するものだということの理解を深める機会になりました。この座談会で日頃の思いを吐露して下さった皆さんに心より感謝申し上げます。

あれから二カ月を経た今も、当日進行役を務めた者の脳裏には、発言者おひとりお一人それぞれの人生観が刻み込まれています。ご協力に只々感謝。

(宣教委員 F・O 記)